

小さい頃はよく姉二人と、祖父母の家に泊まりに行った。自分の家から見るとは違う景色。何もない、けれどそれが好きだった。祖母の作る焼き飯と卵焼きが大好きで、行くと決まったら五人でそれを食べた。祖父が座布団の上に貯金箱の中身を全て出し、「お金取りだ！」そう言っただけ嬉しそうに笑う。これもお決まりだった。最初は驚いて笑ってしまっただけで、ノリノリな祖父を見てみると、その気持ちが嬉しくてたまらなかった。そんな優しい祖父だが、祖父は何度も祖母を困らせた。山に荷物や収穫物を全て忘れてきたり、外で転んで歯が口びるに刺さったり、木の上で枝を切る際に十メートル程の高さから落ちたこともあった。それでも口びるを貫通した歯は折れず、救急車で運ばれた体は手術には至らなかった。祖母は先祖や親戚の話などをたくさんしてくれたが、祖父のそんな失敗談は尽きず、話し上手な祖母に何度も笑わされた。祖母は若い頃から苦勞を重ねてきた、強くたくましい人だ。手を見れば一目瞭然だった。対してとてもきれいな手の祖父は、祖母にたくさん迷惑をかけた。祖父は病気だった。頭の働きや感覚が鈍くなる症状がどこまで影響しているのかは分からないが、私の成長と共に、その影響が大きくなっていくのは分かった。祖父が原因で喧嘩をすることもあったが、二人はとても仲が良く、その喧嘩のかけ合いも漫才のようだった。祖母に怒られたりつつこまれたりした後の、祖父のくしゃつとした笑顔が、私は大好きだった。

祖父は今年の夏に亡くなった。私は祖父を見取った。急だったため、私、祖母、父以外の家族は間に合わなかった。あの日、夜電話が鳴った後すぐに車で向かった。ベッドには全然違う祖父がいた。もう言葉も発せず、目の焦点が合っていないようだった。祖母は祖父の細い体の横にちよこんと座り、苦しさを和らげるために体をさすった。私は黙ってそれを見ていた。その時だった。祖父が腕をのばして祖母の首に回し、近くへ寄せた。驚いた。胸がじーンとして、何とも言えない気持ちになった。祖父がそんなことをするのは初めてだった。祖母が分かったよと言ってまた体をさすっても、何度も何度も、首に腕を回し、そして優しく祖母の頭をなでた。涙が出た。ありがたい。今までずっと一緒にいてくれて、面倒みてくれて、ありがたいなあ。そう言ってるんだ。今まで散々迷惑をかけてきた祖父。祖母がいなくて何もできない祖父。祖母のことが大好きだった祖父。入院した時も家にいる時も、その横にはずっと祖母がいた。祖父の腕の中で、祖母も泣いていた。とても小さかった。「ありがたいね、お父ちゃん。えらかったの。もう楽になるよ。」祖母の横で、祖父は一生を終えた。祖父の症状が重くなり始めた時、姉が言っていた。「おばあちゃん、毎日、おじいちゃんをまだ連れて行かないでって、お祈りしてるんだって。」祖母の方が、祖父を必要としていたのかもしれない。そう思った。お通夜やお葬式にはたっくさんの親戚と会い、今まで祖母から聞いていた名前と自分の関係がようやく理解できた。母の従兄弟にあたるおじさんが話してくれる中で、驚いた話があった。遺影の横に並ぶもう一枚の写真。くしゃつと笑う祖父と、顔をよせてうれしそうに笑う祖母を見て、おじさんは言った。「君らは優しいおじいちゃんしか知らないかもしれないけど、昔はすごく厳しかったんだよ。だから俺らは遊び

に来て話すことなんかなかったし、こんな笑顔見たことないんだ。おばあちゃんの苦労もたくさん知ってる。だからこの写真を見た時、ああー、そうかって思った。俺でもぐつときたつて。だから、この写真が残ってるっていうのは、すごいことなんだよ。」私が思い出す祖父は、ずっと優しくかった。玉入れをして遊んだ時、自らかごをかついで走ってくれたり、かるたを読み間違えながら読んでくれたり、夏にはアイスをだまて買ってきて、無くなったらすぐまた買ってきてくれた。その横には、いつもうれしそうに笑う祖母がいた。仲良しだからね！と言って肩を組んで、踊ってくれたことだってあった。あんなに仲良しな二人を、知らない人もいるんだ。あんなに優しい祖父の笑顔を、横で笑う嬉しそうな祖母の顔を見ることがない人もいるんだ。確かに、お葬式で棺に入れた同じ写真を見て、「あらー、幸せそうやが。いい写真ね。」と微笑む人がたくさんいた。それは今年三月、私達が祖父母に会いに来た際に撮った写真だった。よかった。この写真があつて、本当によかった。

今日も祖母のマッサージをする。これも、祖父母を訪れると必ずする、お決まりの一つだった。そして笑いながらするのは、祖父の話だった。